

---

# 霊夢と紫のアメジスト

ロム虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霊夢と紫のアメジスト

### 【Nコード】

N7348L

### 【作者名】

ロム虫

### 【あらすじ】

博麗霊夢は、今日も唐突に現れた来客にため息を漏らす。——様々な思惑の交差する、幻想的な心理戦ストーリー。相手の心をどこまで読めるのか。そして結末は——？※注意※この作品は東方projectの二次創作作品です。

## プロローグ（前書き）

この小説は東方projectの二次創作です。他人の解釈する世界観にいちいち突っかかってくる暇があったらお帰り下さい。あとキャラクターや設定が原作準拠でない場合があるかもしれませんが、それは俺の勉強不足です。ごめんなさい。

## プロローグ

### プロローグ

博麗霊夢は、今日も唐突に現れた来客にため息を漏らす。

「……また来た」

「何、その言い方。まるで私が足しげく通っているみたいじゃない」  
そこに現れたのは八雲紫。例によって例のごとく、霊夢のすぐ横にスキマから顔を覗かせる形で現れる。

「事実通ってるでしょ」

「通ってないわよ」

「それ、何が基準？」

「私」

「残念不正解」

「え、クイズだったの？」

「いまそうしたの。間違えたんだから帰ってよ」

「また来るわよ？」

「もういいです」

結局、紫はその場所に落ち着くこととなった。

二人は特に会話もせずそこに居る。霊夢はお茶と煎餅に手をつけながら。紫はそんな霊夢の様子を見ていた。まるで大切な者を慈しむような表情で。

しかし、そんな紫の表情に悪戯っぽい笑みがふっと浮かぶ。そして、次の瞬間沈黙が破られる。

「ねえ霊夢」

「まだ居たの」

「それが分からなくなったら老い先短いわよ」

「なら紫は私がいることに気付いたらだめでしょ」

「妖怪的にはまだまだ若いの」

明らかに話が逸れている。紫は霊夢が次の言葉を返すより先に言葉が続ける。

「そんなことよりも霊夢」

「まだ居たの」

「もうそろそろ死んでもおかしくないわ」

「紫がね」

「だから、妖怪的にはまだまだ若いの」

また話を逸らされる。紫もさすがにむっとくる。霊夢はそんな紫の様子を横目に見て、心の中で思う。なんて年に不釣り合いな仕草をするのだろう、と。

「それでね、霊夢」

「何？」

やっと、霊夢は話を聞く気になった。それが紫の表情変化が理由だとは、その紫本人も気付かない。

「外の世界の恋人同士っていうものは、だいたい段階を踏んで親しくなるものなの」

「へえ」

興味が無さ過ぎる。霊夢はそんな様子があからさまに態度に出た返事をする。

「でもね、私ぐらい長く生きていると、そういうまどろっこしいやり方が面倒に感じることも多々あるわ」

「あれ、お若いのでは？」

「長く若く生きてるの」

「その形容詞、並べるとすごい違和感があるんだけど」

「妖怪的にはアリなのよ」

「私が人間の時点で何でもアリに出来るでしょ、その理屈」

「よく気付いたわね」

「若いからね」

またしても話が逸れる。ただ、こうした脱線は二人にとっては日

常的なもの。どちらにも不快に思うようなことは無い。

「それでも私はとにかく段階を踏むというのが面倒で嫌なわけ。分かる？」

「とりあえず聞き入れとく」

「じゃあこれから本題」

そう言って、紫はスキマの中に手を突っ込み、何かを取り出す。指輪だった。紫色の宝石のあしらわれた指輪。

「霊夢、愛してる。これはその証よ。受け取って」

「お金になるなら」

心にもないことを言いながら指輪を受け取る霊夢。紫も分かっているのか、霊夢の非道とも言える返答に対して何も言わない。

「それにしても、何で今更こんなものを？」

「どういうこと？」

「だって、私はこんなこと言われなくても紫のことを愛してる。紫もそうなんでしょ？ だったらこんな行動不要じゃない？」

「でも、持っていて欲しかったの」

紫は言いながら、宝石を持つ霊夢の手を握る。

「これはアメジスト——紫水晶っていう宝石をあしらった指輪なの」

「紫水晶。つまり、紫ってこと」

「そう。私だと思って、いつも身に付けておいてほしいの」

「嫌よ」

霊夢は切り捨てるように言って指輪を投げ捨てるフリをする。

「ああっ！」

本気で投げられたと思って泣きそうになる紫。最強クラスの妖怪としての威厳は微塵も無い。

「ひどい、霊夢……」

「嘘よ。投げてない。ほら」

霊夢はそう言って、自分の手を広げてみせる。そこにはしっかりと指輪が握られている。

「もう、本気で泣きそうになったわ。今のは」

「そんな表情も見てみたいけど。私は」

言いながら、霊夢はその指輪を左手の薬指に嵌める。

「ありがとう、紫」

「そう、嬉しいわ」

「じゃあ、お礼に。紫、あっち向いて」

霊夢は紫のほうをちょうど指で指し示す。紫は何があるのか、と思っ  
て首をその方に向ける。霊夢と間逆の方向なので、霊夢が何を  
するつもりなのかが分からない。

「いいわよ、こっち向いて」

ある程度間を空けてから呼び声が掛かる。紫は期待交じりにす  
と霊夢の方を向く。

すると、不意に眼前に霊夢の顔が迫った。そして――唇を奪われ  
る。

突然の出来事に呆氣に取られる紫。霊夢はしてやったような満足  
げな笑みを浮かべて紫の言葉を待っている。はっとして、紫は一言  
だけ呟く。

「卑怯よ」

「それは、どうも」

満足げに言う霊夢。そしてそれ以上は何も言わず、お茶とお菓  
子に手を出し始める。

「……帰るわ」

顔を真っ赤にして、それでも頑張って平静を装う紫。その様子を、  
霊夢は心の底から可愛いと思った。こんなに綺麗で、胡散臭い妖怪  
のことを。

「どうしたの、クイズでも間違えた？」

「そうね。計算ミスよ」

そして、紫はスキマの中へとその姿を消す。来たときと同様、一  
瞬にしてその場から立ち去る。

「はあ？」

霧雨魔理沙は、自分の親友でもある霊夢の話を聞いて声を上げる。

「悪い、私の耳が悪いのか？ もう一回言ってくれ」

「私、紫となら愛し合ってみたいのよね」

「あー、やっぱり耳が悪いのか。あ、それとも頭が悪いのか？ 霊夢の」

「両方あんだだから」

呆れた様子で反論する霊夢。だが、魔理沙も黙ってはいられない。何しろ、八雲紫という妖怪に対してそこまでいい印象は抱くことが出来ない。この際、幻想卿ではよくあることなので女性同士であるということに関しては何も言わない。

「で、あのスキマ妖怪にそこまでの魅力があるのか？」

「あるわよ。可愛いし、綺麗だし。歳相応に見えないほど若々しくて、ユニーク。まあ、最後のは幻想卿だとよくあることだけど」

「あー、色々と同意しかねるな」

「特に可愛いのは本当よ」

「よりによってそこをプッシュするのか」

次第に霊夢の盲目加減に圧され、困惑する魔理沙。

「今日だって、わざわざ私のところまで来てこの指輪をプレゼントしてくれたの。ほら、綺麗でしょ？」

そう言って、霊夢は薬指の指輪を魔理沙に見せびらかす。魔理沙はそんな霊夢の様子に呆れさえ覚える。

「でね、私がお礼にキスしたら、顔を真っ赤にして、恥ずかしがって帰っちゃったの。ちょっと残念だけど、でもそういうところも可愛いでしょ？」

「うん、まあ、そうだな」

返事に困り、相槌程度の言葉しか返せずにいる魔理沙だった。

「で、それが、今日の昼ごろの話なんだよね？」

「そうね」

「それをわざわざ私んちまで来て話すってのはどうなんだ？ しか



も、まだ午後二時を回ったところだぜ？」

「え、紫の可愛さをもっと沢山の人に知ってもらおうと思って」

「まるで新興宗教の教団員なみの活動力だな」

「でしょ？ 私、紫のためならわりといろんなことするわ」

「そこは何でもって言っとけ」

二人は魔理沙の家のテーブルを囲み、お菓子と不思議なジュースを飲みながらそんな会話をしていた。

ちなみに魔理沙の家に来るまでの間、霊夢は道行く者達に悉く紫の可愛さを布教していた。そうなのかー、と軽くあしらわれたり、？ゆえに話が理解されなかったりもしたが。

「とにかく、紫最高。大好き。ああもう、なんでこんなに好きなのかしら。分かる？」

「すまん、分からない」

「そう」

あっさり引き下がる霊夢。安堵にため息を吐く魔理沙。

「じゃあそろそろ私は帰るわね」

「ん、そうか」

帰る、という言葉に安心した魔理沙だが、霊夢は見事に期待を裏切った。

「これから紅魔館にも行って紫の素晴らしさを布教してくるわ」

「お前の神社は紫を祭ってるのか」

「うちは布教しない主義」

「じゃあ帰れよ」

「個人的な趣味をどうこう言われる筋合い無いわよ」

「お前の趣味に付き合わされる身にもなれ」

「そういえば魔理沙、この間の（毒）キノコスープのことだけど」

「個人的な趣味をどうこう言う筋合いなんて無かった」

「でしょ」

その会話を最後に、霊夢は魔理沙の家をあとにした。別れの挨拶も早々に空へと飛び立つ霊夢。魔理沙は見送りもせず、何かを考

えている様子。

「……それにしても、流行ってるのか？」

呟きながら、魔理沙はポケットに手を伸ばして何かを取り出す。

「指輪の、プレゼント」

その手には、七色の光が浮かぶ宝石があしらわれた指輪があった。

——スキマの中の、よく分からない空間上に、三人の姿があった。  
一人は他でもない、スキマ妖怪である八雲紫本人。

二人目は、永遠亭の主、蓬莱山輝夜。

三人目は、その従者であり医者でもある八意永琳。

「——こんな遊びを思いつくなんて、どうかしてるわ」

紫は呆れたような口調で呟く。

「最近読んだ本でね、似たようなことをやっていたの。面白そうでしょ？　だったらやるには充分な理由になるわ」

輝夜は自慢げな口調で語る。

「輝夜の遊びに付き合せてごめんなさいね」

主の口調とは裏腹に、永琳は丁寧に、申し訳なさそうに呟いた。

「いいのよ。私だって同意したんだから共犯よ」

「それもそうね」

紫の冗談めいた言い方に、永琳も笑う。

「それでは、後の作業は任せて頂戴」

「ええ。私たちは、『景品』の製作に戻るわ」

二人がそう言葉を交わすと、不意にスキマが現れ、扉のように開く。向こう側には、永遠亭があった。

「それにしても久しぶりの外出ね」

「たまには家に引きこもっていないで、外で弾幕ごっこでもしてきたらどうですか？」

「まだ東方紅魔卿ノーコンティニュークリアしてないからいいや」  
輝夜と永琳はそんなことを言いながらスキマをくぐり、永遠亭へ

と帰っていく。

残った紫は、何を思ったか、また別のスキマを作る。そして、何か台のようなものをその中から出して目の前に置いた。

その台の上には、七つの宝石球が飾られていた。一つ一つが水晶玉のように大きい。また、それぞれの宝石が全て異なる色をしていた。

一つは紫色の宝石、アメジスト。

一つは緑色の宝石、ダイオプテーズ。

一つは七色の宝石、ウォータール。

一つは黄金色の宝石、ヘリオドール。

一つは天青色の宝石、セレストাইト。

一つは暗黒色の宝石、シヨール。

そして中心の一つは幻を閉じ込めた無色の宝石、ファントムクリスタル。

「――それに、これで八つ」

紫は呟きながら、自分の懷から一つの宝石を取り出す。

その手には、紫色の宝石があらわれた指輪があった。

「……ターフェアイト」

紫の呟いた言葉は、その宝石の名前だった。

翌日、幻想卿中にチラシがばら撒かれていた。発行者は不明。天狗の仕業でもないらしく、幻想卿中の誰もが驚いていた。だが、それよりも驚くべきはそのチラシの内容だった。

『――これは、ちょっとしたゲームです。』

幻想卿内のある人物、合計七人に、指輪を渡しました。

その指輪の名前と所有者を、密告してください。

逆に、指輪所有者は密告されしないで下さい。

どうでしょう、とても簡単な話ではありませんか？

ただ、いささか簡単すぎるのでルールを設けます。

- 一、指輪所有者は、他の指輪所有者の指輪の名前を密告出来ない。
- 二、指輪所有者から聞き出した名前でない限り、指輪の名前は密告してはならない。

三、指輪所有者は、指輪を交換できる。

四、密告された所有者は、指輪を管理者に返還しなければならぬ。その後、管理者から密告者に指輪が渡される。

五、指輪所有者は、能力を使ってはならない。代わりに、指輪に能力が込められているので、それを使うことは許される。

六、本日の正午から一週間後、指輪所有者に指輪と交換で景品が与えられる。

——以上がルールとなります。

なお、密告は幻想卿全体の各地に八雲紫のスキマを用意いたしました。どうかそちらをご利用下さい』

——という、文面のものだった。

無論、靈夢は気付いた。自分の持っている指輪が、八雲紫によって渡されたものが、このチラシで言われている指輪のことだと。

「……スキマが密告に使われる、ってことは紫も何か関わってるのね」

靈夢は呟くように言う。そして決心した。紫に何らかの思惑があるのなら、その通りに踊ってやろうではないか、と。

ただ、負けてやるつもりは一切無い。最終的に、自分が勝つ。靈夢はそう決心する。

「正午、ってことはあと二時間ぐらいね」

時刻は午前十時前。靈夢はゆっくりと今後の作戦を考えることにした。

「——やってやろうじゃないの」

不敵な笑みを浮かべつつ、博麗の巫女は宣言した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7348/>

---

霊夢と紫のアメジスト

2010年10月9日16時40分発行